

# 自殺希少地域における自殺予防因子の研究

—自殺希少地域、青森県旧平館村のコミュニティ特性から—

岡 檀

和歌山県立医科大学

## <要 旨>

本研究の目的は、自殺希少地域における自殺予防因子を抽出し、その結果からコミュニティ特性と自殺率との関係について考察し、自殺多発地域における予防対策について提言を行うことにある。

青森県の東津軽郡北東部に位置する旧平館村（たいらだてむら、2005年より外ヶ浜町）は、自殺希少地域の一つである。47都道府県中、特に自殺率が高い青森県にあって、周辺町村の中でも突出した平館村の自殺率の低さは注目に値する。

同村の社会文化的背景、住民気質などを把握し、自殺発生を抑制する因子を明らかにすることを目的に、2012年より現地調査に着手し、住民らへのインタビュー、アンケート調査などを行なって、その結果を分析した。また、筆者自身が行なった、自殺希少地域—徳島県旧海部町における調査結果とも比較し、それら地域特性の類似点を検討した。

分析の結果、平館村では隣接する町村に比べ、友人たちとより多く交流していた。また平館村では、大きな困難に遭遇した場合の自殺への傾きがより小さいと考えられると同時に、自殺への偏見や白眼視の傾向がより弱いという結果が示された。平館村のこうしたコミュニティ特性には、先行研究対象の自殺希少地域の特性とも類似する点が見受けられた。

<キーワード> 自殺 自殺希少地域 自殺予防因子 コミュニティ

## 【はじめに】

自殺を引き起こす社会的要因は多岐に渡るが、中でも、人の生活基盤であるコミュニティの特性は対策の重要な鍵となる。先行研究を概観すると、自殺多発地域における自殺危険因子の研究は数多くの蓄積があるのに対し、自殺希少地域を対象とした自殺予防因子の研究はほとんど行われていない。従来とは異なる視点を持つことにより、自殺対策に資する新たな示唆を得られる可能性があると考え、自殺希少地域における自殺予防因子の研究を行うこととした。

本研究の目的は、自殺希少地域における自殺予防因子を抽出し、その結果からコミュニティ特性と自殺率との関係について考察し、自殺多発地域における予防対策について提言を行うことにある。

先行研究において明らかとなった、自殺希

少地域における自殺予防因子に照らし、その他の自殺希少地域の特性との類似点を抽出することを試みる。

## 【対象】

青森県の東津軽郡北東部に位置する旧平館村（たいらだてむら、以後、平館村）は、自殺希少地域の一つである（図1）。隣接する蟹田町、三厩村と合併し、2005年より外ヶ浜町となった。

合併直前の平館村の人口は2,255人、面積は48.19平方kmである。主たる産業は周辺町村と同じ漁業であり、同村では特にホタテ養殖と焼干し加工が盛んである。

1973年～2002年の全国3,318市区町村の標準化自殺死亡比を算出し30年間の平均値を求めたところ、平館村の値は49.0であり、

全国自殺率下位 1% の群に含まれていた。隣接する旧蟹田町は 90.8、旧三厩村は 130.2 だった。

47 都道府県中、特に自殺率が高い青森県にあって、周辺町村の中でも突出した平館村の自殺率の低さは注目に値する。

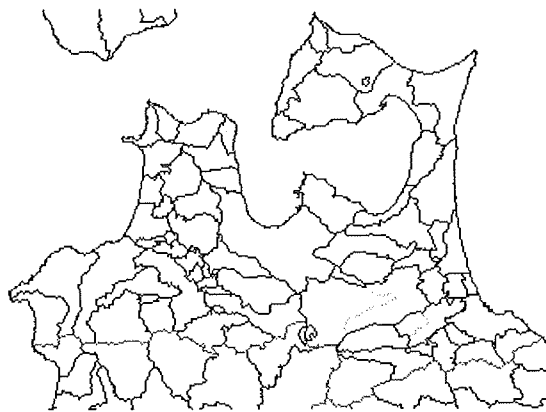


図 1 青森県旧平館村

【研究方法】

平館村の社会文化的背景、住民気質などを把握し、自殺を抑制する因子を明らかにすることを目的に、2012 年より現地調査に着手した。

まず、平館村の住民、行政や保健福祉に携わる職員などへのインタビューを行ない、地勢や産業の似通った旧蟹田町、旧三厩村との比較を行うことにより、平館村特有の要素の抽出を試みた。

2012 年 11 月、外ヶ浜町福祉課が、旧 3 町それぞれから無作為抽出した成人男女住民を対象に、「こころの健康に関するアンケート調査」を実施した。ストレスや悩み、趣味、隣人との付き合い、自殺に関する意識など、19 問と、13 の下位項目から構成されている。これは、外ヶ浜町が 2006 年に実施したアンケート調査の項目を基本的に踏襲したものであるが、今回新たに援助希求に関する項目と、

温泉利用頻度を尋ねる項目を追加した。結果を、カイ 2 乗検定、因子分析などを用いて検討した。

また平館村住民は、村内にある温泉を日常的に利用する習慣が昔からあったという事例をふまえ、二つの温泉の泉質について調査した。

【結果】

平館村の住民、行政や保健福祉に携わる職員などを対象にインタビューを行なったが、これまでのところ、旧 3 町の間に大きな差異は示されていない。唯一の相違点は、平館村では昔から村内にある温泉を日常的に利用し、現在もその習慣が残っているという点だった。

アンケート調査用紙の配布は 1,088 票、回収率は 90.53% だった (表 1)。

表 1 アンケート回収結果

平館地区状況			
年齢構成	回収率		
	男性	女性	計
20~29	73.33	114.3	93.1
30~39	100	85.71	92.5
40~49	112	111.5	111.8
50~59	80	80.56	80.3
60~69	81.58	97.62	90
70以上	82.98	85.42	84.21
不明			
合計	90.23	95.72	93.07

蟹田地区状況			
年齢構成	回収率		
	男性	女性	計
20~29	76.47	100	89.19
30~39	81.48	82.14	81.82
40~49	78.13	96.88	87.5
50~59	87.5	100	93.65
60~69	97.5	95	96.25
70以上	89.47	88.57	89.04
不明			
合計	87.63	96.77	92.2

三厩地区状況			
年齢構成	回収率		
	男性	女性	計
20～29	35.71	75	56.67
30～39	81.25	63.64	71.05
40～49	75.86	109.4	93.44
50～59	68.57	89.47	79.45
60～69	94.12	89.19	91.55
70以上	88.1	82.5	85.37
不明			
合計	81.18	90.81	86.2

全体地区状況			
年齢構成	回収率		
	男性	女性	計
20～29	63.04	96	80.21
30～39	87.1	77.46	81.95
40～49	87.21	105.6	96.59
50～59	78.35	89.52	84.16
60～69	91.07	94.12	92.64
70以上	86.61	85.37	86
不明			
合計	86.42	94.44	90.53

カイ 2 乗検定を行なって、3 町間の差を確認した。

友人と話をする頻度は、平館村が最も高く、統計的に有意な差があった（表 2）。温泉を利用する頻度は平館村が最も高く、有意な差があった（表 3）。その他の項目については、有意差は示されなかった。

表 2 友人と話をする頻度

	ほぼ毎日～週に1回程度		月に一回程度～あまり話をしない	
蟹田地区	197	59.0%	137	41.0%
平館地区	198	61.9%	122	38.1%
三厩地区	204	68.7%	93	31.3%

p<0.05

表 3 温泉を利用する頻度

	月に0回～1回程度		月に5回以上	
蟹田地区	258	79.1%	68	20.9%
平館地区	238	76.8%	72	23.2%
三厩地区	246	87.9%	34	12.1%

p<0.005

本アンケート調査では、自殺に対する意識を尋ねる質問が 13 項目あった。以下に示す。質問に対し、「そう思う」から「そう思わない」まで 4 段階の尺度で回答することになっている。

問. あなたは自殺についてどのように思いますか。

- ・ 恥ずかしいことだ
- ・ 仕方のないことだ
- ・ うらやましいことだ
- ・ 困ったことだ
- ・ 立派だと思う
- ・ 大変なことで、なんとかしなければならぬ
- ・ 悲しいことだ

問. 以下の 6 つの質問すべてについて、あなたはどのように思いますか。

- ・ 働かなければ生きる意味はないと思う
- ・ 自殺は、してはならないことだと思う
- ・ 自殺は、事情があればやむを得ない事だと思う
- ・ 自殺をする人の気持ちがわからない
- ・ 家族に負担をかけるくらいなら、死んだ方がましだと思う
- ・ 自殺は、予防できると思う

これらの質問 13 項目に対する回答につい

て因子分析を行なったところ、4つの因子に分かれた(表4)。すなわち、(1)哀惜：自殺や自殺した人を悼む気持ち、(2)諦念：深刻な困難に遭遇した時には死を選ぶこともやむを得ないという気持ち、(3)白眼視：自殺や自殺した人に対する偏見や差別の気持ち、(4)美化：自殺を立派な行為として尊ぶ気持ち、である。

表4 自殺に対する意識の因子分析

	因子			
	1	2	3	4
悲しい	.776	.068	-.073	-.090
大変なこと	.738	.018	-.013	.038
自殺はしてはならないこと	.397	-.301	.205	.015
予防できる	.322	-.277	-.085	.029
やむをえない	.012	.786	-.072	-.096
仕方ない	.014	.619	.139	.073
家族へ負担くらないなら死んだほうが	.023	.512	-.015	.054
恥ずかしい	-.054	.040	.750	-.004
気持ちわからない	-.173	-.090	.575	-.064
こまったこと	.244	.064	.414	-.028
働けなくなれば生きていく意味がない	.168	.172	.278	.119
立派	-.025	-.051	-.009	.738
うらやましい	-.016	.078	-.027	.708

因子抽出法: 主因子法

さらに、旧3町ごとにこれら4つの因子の得点の平均値を求め、グラフを描いて比較した(図2)。

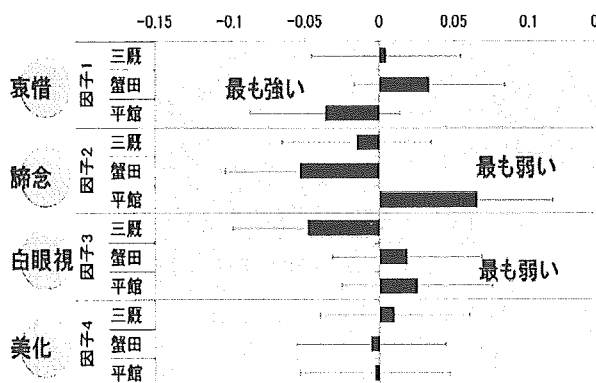


図2 自殺に対する意識の因子分析  
旧3町別因子得点の平均値

3町中、平館村は自殺に対する哀惜の念が最も強かった。観念し諦める気持ちは最も弱

く、と同時に、自殺を白眼視する気持ちも最も弱かった。

平館村住民は、昔から村内の温泉を日常的に利用しており、現在もその習慣が残っているという事例をふまえ、村内の「不老不死温泉」および「湯の沢温泉」についてそれぞれの泉質を調べた。

生活水や地下水に抗躁剤に使用するリチウム成分が多く含有されているほど、その地域のうつ罹患率が低まる可能性があるという先行研究結果をふまえて調べたところ、平館村にある二つの温泉とも、リチウム含有量は平均的な値だった。

### 【考察】

自殺希少地域である青森県平館村には、なんらかの自殺予防因子—自殺発生を抑制する因子が存在するとの仮説を立て、周辺町村との比較を行った。

平館村を含む旧3町はよく似通っていたものの、その中でも、平館村住民の気質により強く表れている傾向を見出すことができた。

平館村は、自殺への哀惜の情が最も強く、その一方で、観念し諦めるという気持ちが最も弱かった。このことから、平館村住民は自殺への傾きがより小さいと解釈することができる。この点は、先行研究対象である自殺希少地域—徳島県旧海部町の住民気質と符号している。

また、同村では、自殺問題や自殺した人に対する偏見や白眼視傾向がより小さいという可能性が示唆された。

前述の自殺希少地域では、うつなど精神疾患への偏見が希薄であり、そのことが住民の援助希求を促している関係が明らかとなっている。適切な援助希求行動は自殺予防対策の鍵であるが、平館村が、自殺や自殺につなが

る問題に対しより偏見が小さい傾向を示したことは、住民らの援助希求が促されやすく、自殺予防に寄与しているという可能性が考えられる。

なお、平館村住民は、村内にある温泉を日常的に利用する習慣が昔からあったという事例をふまえ、二つの温泉の泉質について調査したが、これまでのところ、うつや自殺を抑制する要素は見出されていない。

同村住民が友人と話をする頻度が最も高いという結果は、温泉をよく利用する住民の生活様式と関連があるかもしれない、そのことが住民の精神衛生に良い影響をあたえている可能性が考えられる。

本研究では、自殺希少地域である青森県旧平館村のコミュニティ特性や住民気質から、自殺発生を抑制する要素を抽出しようと試みた。同村においてこれまでに得た知見は、先行研究対象となった自殺希少地域での研究結果を支持する内容ではあったものの、自殺予防因子を特定するまでにはさらなる検討を要する。引き続き、同村における調査を行なっていく予定である。

#### 【参考文献】

1. 青森県自殺予防地域支援強化事業 外ヶ浜町こころの健康に関する調査報告書. 青森県東地方健康福祉こどもセンター保健部、2006年3月
2. 平成24年度保健衛生事業計画について. 外ヶ浜町福祉課、2012年
3. 自殺希少地域のコミュニティ特性から抽出された「自殺予防因子」の検証—自殺希少地域および自殺多発地域における調査結果の比較から—. 岡檀、山内慶太、日本社会精神医学会雑誌、第21巻2号、p167-180、2012年5月
4. 日本における自殺希少地域の地理的特性に関する考察—1973年～2002年の全国市区町村自殺統計より標準化死亡比を用いて—. 岡檀、藤田利治、山内慶太、厚生学の指標、第59巻4号、p1-9、2012年4月
5. 「自殺希少地域」徳島県旧海部町における相互扶助組織の特性—旧海部町の「朋輩組」と他町の類型組織との比較から—. 岡檀、コミュニティ心理学研究、第15巻2号、p136-147、2012年3月
6. 自殺希少地域における自殺予防因子の探索—徳島県旧海部町の住民意識調査から—. 岡檀、山内慶太、日本社会精神医学会雑誌 第20巻3号、p213-223、2011年7月
7. 高齢者自殺希少地域における自殺予防因子の探索—徳島県旧海部町の地域特性から—. 岡檀、山内慶太、日本社会精神医学会雑誌 第19巻2,3号、p199-209、2010年11月
8. 自殺希少地域・徳島県旧海部町に見る、援助希求を促す環境づくり. 岡檀、精神科臨床サービス 第12巻2号、p258-261、2012年4月

#### 【謝辞】

本研究の遂行においてお力添えをいただきました、青森県外ヶ浜町役場、および、大妻女子大学大学院人間文化研究科の反町吉秀教授に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。